

●ボケの神祕

お言葉ですが……

いわゆるボケ老人のことを、正式には、つまり医学・法律用語としては、痴呆ちほうと言うのだそうだ。

知りませんでした。法律用語とはねえ。

ところがこの言葉が、評判がわるい。各方面から、もうちっとおだやかな名称を考えろ、と政府に要望がある。

そりゃそうでしょう。「アホウ」を多少シカツメらしく言ったにすぎないんだものね。

いやアホウより悪いかもしれん。

小生六十年來親友川口に「おまえはアホじゃ」と言いつづけておるが、川口は毎度ヘラヘラ笑うのみである。しかしもし「おまえは痴呆じゃ」と言ったら——さすがの川口も俄然怒り出すかもしれません。



高島俊男

藤枝リュウジ

イラストレーション

ボケ老人は今後急速に増加する勢いであり、関連する法令もふえるであらうから、この際用語のことも考

えなおしてみようと、厚生労働省の老健局が検討会を設けた。それに小生が呼ばれた。

「えっ、そりゃまたなんで」と思うでしょ？ 当人も不思議です。

推測するに、こういうことじゃないかと思うんだ。

委員会というからには、医師会長とか看護会長とか、各方面を代表する人たちが集められる。もとよりみな、面倒を見るがわの人たちである。

しかし一人くらいは、面倒を見られるがわも入れといったほうがいいんじゃないか。そういう意見が出た。

局長「それはそうだが、しかし丸ボケの人が来たんじゃ、話が進まな

くなるおそれがあるしなあ」

隊士「それならば姫路に『半ボケの高島』と呼ばれるフーテン爺いが居ると聞き及んでおりますが……」

局長「うむ、半分なら仔細あるまい。早速そやつを召取って参れ」

隊士「ははっ」てんで、お城の辺をほっついていていた高島はあえなく捕獲、花のお江戸へ召喚——ということとなんじやないのかなあ。

右のごとき次第で先日第一回の会合があったんですがね、最初だからまだ用語の問題には至らない。ヴィデオを見たり話を聞いたりの学習であったが、これが実におもしろかった。ボケというのは、ほとんど神祕的と言っていいほど不思議な現象なんです。

ヴィデオの一つはNHK「クロウズアップ現代」放映の、オーストラリアのクリスティーン・ブライデンという婦人。政府の高官だったがアルツハイマーになってやめ、今は御主人に手をひかれて世界中をボケについて講演してまわっている。

「もう自分の娘もわからない。今日が何月何日もわからないんです」とこの人自分で言う。なるほど脳の写真を見るとずいぶん縮んで、頭蓋骨との間に広い空洞ができています。

しかしそれなら講演の際、自分が何の用でここに立っているのか、今日これまでに何を述べ、これから何を語るのか、わからなくなりそうに思うがそういうことはないんですね。明るく表情豊かで、よどみなく整然と話をする。不思議です。

もう一つのビデオはテレビ朝日の番組で、和田行男さんというかたが主宰していた東京足立区の施設「こもれび」の、八人の「婆さん」の生活をうつしたものである。

ビデオのあとこの和田さんが話をした。元国鉄の電車修理工で年は五十くらい、関西弁丸出しの爽快な人である。ビデオを見、話を聞いて、あたしやすっかり敬服した。あとで著書『大逆転の痴呆ケア』（中央法規）を読んでいよいよ敬服した。

この人は「痴呆状態にある人」のことを「婆さん」と呼ぶ。爺さんも含めて「婆さん」なんだそうです。さしづめ小生は「半婆さん」ですな。ビデオを見て初めて知ったのだが、ボケというのは、言葉はまったく問題ないですね。人の脳のなかで、「こと」と「ことば」とは別の場所が管轄しているらしい。

婆さんたちは、「こと」のほうは甚だ心もとない。もう何年もここにいるのに、今日来たばかりだと思っ
ていたりする。しかし「ことば」のほうはごくふつうで、陽気によくしゃべる。いたって明晰で、筋道が通っている。

それで思い出したことがある。小生の知っている女の人で、四十
二歳の時に大病をし、二十五歳ころ以後の記憶が全部消失した、という人がある。回復した時、当然自分は二十五だと思っている。病室のベッドのわきに中学生くらいの見知らぬ男の子が坐っているの、看護婦さんが来た時「このかたは？」ときいたら、「まあ息子さんじゃありませんか」と笑った。憤然として「私は未婚ですから子供はありません！」と答えた。
看護婦さんは困ってお母さんをつれてきた。すぐわかったが、「お母

さんどうして急にこんなに老けたのかしら」と思ったそうさ。

これはボケではないが、やはり頭のなかの「こと」の部分と、「ことば」「こところ」の部分とは別らしいとわかりますね。人の言を理解して的確に答える能力はもとより、憤慨したり悲哀を感じたりする能力も、何ら損傷していないようである。

次の日から毎日、「おもしろかったおもしろかった。ボケのことなんにも知らなかった」と至るところで言うて回った。

小生なみに無知なものもある。「へえ、口をアングリあけてよだれを垂らしているものと思っていたがなあ」と言ったやつがあった。何とまちがえてるんだらう。

講談社OBの大村さんの所へ行つて話したら、「うちの親族にもちょっとボケかけた爺さんがいてね」と

こんな話をしてくれた。

その爺さんの長年つれそった女房（もちろんもうお婆あさん）が腕時計の鎖をチャラチャラ鳴らして、「あたしはこの音が好きなのよね」と言う爺さんはニッコリ笑って、「わたしの家内もそうなんです」と答えた。お婆あさんびっくりして「えっ、じゃあたしは誰なの？」と叫ぶと爺さんすこしも騒がず、

「いまそれを考えているんですよ」と言ったよし。

この話、反芻すればするほど味わいが深い。つぎの日早速さる出版社の幹部に話したら、「ボケの神髄ですな」と太鼓判を押してくれた。

言語の完璧は言うまでもない。「こと」のほうも、わが妻が時計の鎖の音を好むことはちゃんとおぼえている。なのに、いま目の前にいるのがその妻であることはわからない。神秘的ではありませんか。

お言葉ですが……



高島俊男 藤枝リュウジ
イラストレーション

「癡呆」という日本語は、そんなに古いものではない。ほぼ大正以後の語と置いていいのであるが、そのことを述べる前に、『日本国語大辞典』第二版（以下日国二）の「ちほう【痴呆・癡呆】」条の「補注」について言っておこう。こうある。

△「唐話纂要一」に「癡呆タハケ」とある。▽
唐語は支那語。唐話纂要は十八世紀初め岡島冠山が作った支那語教科書である。

知らぬ者がこれを見ればあたかも当時すでに癡呆という語があったかのごとくであるが、そうではない。これはチャイ（現代音 chidan）である（のちの唐語を解せぬ者が誤ってチハウとよんだ可能性はあるが）。人を混乱させる記述である。

なお癡は痴の正字だが痴も古くよりに用いられており同字異体の関係にある。以下引用を除き痴を書く。

おなじく日国二に、△「医語類聚（1872）△奥山虎章△「Paranoea 痴呆又譫語」とある。この書についても奥山虎章についてもわたしは知るところない。明治初めにお雇い外国人（医師）が果たえた西洋の医学用語を当時の医者がこう訳したものか。ヘボン『和英語林集成』初版（慶応三年）に「ano アホウ 阿呆」とあるところより見て、「痴呆」の音はチハウ（チホウ）であろう。

いづれにせよ、この医語類聚は飛び離れて早い。一般用語として出てくるのは大正

になつてからのようだ。日国二は有島武郎『或る女』三四（大正八年）と寺田寅彦『丸善と三越』（同九年）を引いている（それより早い用例は見つからなかったのである）。

『或る女』はヒロイン葉子が恋人倉地を「痴呆のやうにしてしまひたい」というところ。前後を見るに「腑抜け」というほどの意に用いているようである。日国二はこれを医学用語の用例としてかかげているが、一般語であろう。

「丸善と三越」は、「誰れかゞ云つた寝言のやうな謎のやうな言葉」として、「富む事は美德である。富者は其の美德を餘り多く享有する事の罪を自覚するが故に、其贖罪の為に種々の痴呆を敢行して安心を求めんとする」云々を引く。誰の言である

か小生知らないが、日本人ではなきそうだ。この「痴呆」は「愚行」くらしいの意かと察せられる。有島にせよ寅彦にせよ、どうもまだ、語がおちついていない。

これらより十数年後、太宰治の「ロマネスク」（昭和九年）にこうある。△三郎はやがてひとつの態度を見つけた。無意志無感動の痴呆の態度であつた。▽

ここまで来ると語がおちつきを得ている。「無意志無感動」と合意も明確である。この間にこの語は相当使いこまれたと推測される。

国語辞典の収録状況を見ると、『大日本国語辞典』（大正六年）、『大言海』（昭和九年）ともにない（刊年は「ち」を含む巻）。小生所持のものでは『廣辞林』の新訂版（昭和

九年)に、

へちほう「癡呆」あほう。ばか。とあるのが最も早い。「アホウをもつたいをつけて言った語」のあつかいである。

しかるに『大辞典』(昭和十一年)にはこうある。

へちほう 癡呆 脳の器質的障礙のために精神的所有の一部或は全部を崩壊・滅失せる状態。麻痺性癡呆…老耄性癡呆…(以下略)

こちらは医学用語のあつかいである。

小生英和辞書はほとんど持つてないのだが、所持のかぎりでは『研究社スクール英和新辞典(新版)』(昭和十五年)の dementia の項に「(醫)痴呆(ちほう)」とある。大辞典の「癡呆」もディメンシアの訳語としての説明なのであろう。なお国語辞典では『辞海』(昭和二十七年)の「ちほう「痴呆・癡呆」」の

項に「[医] dementia」と出る。

これらにより、昭和の初めごろに医学界がディメンシアの訳語として「痴呆」を採用したものと猜せられる。その際、明治初めのパラノイアの訳語「痴呆」が参照されたかもしれない。

以後この語は、一般用語と医学用語を兼ねたものとなる。『広辞苑』第一版も左のごとく二本立てである。

へちほう「痴呆」脳の障害のため、精神作用が一部或は全部崩壊・滅失した状態。ばか。あほう。

前半は医学用語として大辞典を、後半は一般語として廣辭林を襲っている。

第二版(昭和四十四年)以後「ばか。あほう」が消え、医学用語の説明のみとなって現在の第五版にいたっている。「ばか。あほう」を不穏当としたのであろうが、大正から昭

和にかけてその意で用いられたことは確かなのだから、まるきり抹殺してしまったのも変である。

「痴呆」二字のうち、痴はおろかの意で何ら問題ない。

呆の字を、なぜ日本でハウ(ホウ)とよみ、その音でおろかの意とするのか。これがむづかしい。

これには当然日本語「あほう」および表記「阿呆」の問題がからんでくるのだが、その前に漢字「呆」の問題を検討しておこう。

説文解字「保」の項に「呆は保の古文」とある。これは千六百年後の康熙字典にいたるまで踏襲されている。つまり呆は保と同音同義というのであるが、実際に呆が保の別字として用いられた例はなく、呆の字は言ってみれば空家になっていた。

唐末ごろから話し言葉の記録が行われるようになる。初めは禅宗の高僧の発言を弟子が書きとめたもの。ついで宋元のころから盛り場の講釈師のタネ本ないし筆記本が出てくる。話し言葉だから文字のない語が多い。どんどんアテ字や造字が用いられた。

このころから今日にいたるまでよく使われる話し言葉に「タイ」(現代音記)というのがある。「びっくりして口あんぐり」の意である。これにあいていた呆の字が使われた。何故この字が採用されたのか今となってはわからない。驚呆、目瞪口呆など、いろいろに使う(なお同じ語のために「黙」という字も作られたが、呆のほうがよく用いられる)。

以上要するに、呆は「ほんやり」「魂の抜けた」の意である。しかしこれを呆とよむのであれば、そういう意義はない。ないはずなのに、今の日本人はそう用いているのである。——この話つづく。

「お言葉ですが・・・」 446

「痴呆の歴史」補正

高島 俊男

井手 佐武郎 ≪「痴呆」という言葉、「呆け」という言葉―敬老の日に寄せて―≫ (日本医事新報 3521、平3・10・19)、および同 ≪呉秀三と門脇眞枝―重ねて痴呆という言葉、呆けという言葉―≫ (同 3603、平5・5・15) によれば、明治以後の医学辞典の Dementia の訳語、左の通り。

医語類聚 (明11) 狂の一種

コノ医語類聚トイフ本、日本国語大辞典デハ明治五年トナツテキル。

独逸医学辞典 (明19) Dementia 記載なし。

ノイエスメデニツシユウエルターブーフ (明35、金

原医籍店) 全癡瘋癲、癡呆。

臨床医学辞典 (明36、南山堂) 癡呆、瘋癲。

独羅英和新医薬大辞典 (大12、金原書店) Dementia

麻痺狂。Dementia Semiles 老人性癡呆)

また、同じく『呉秀三小伝』北林貞道「我邦斯学の革命者たる呉秀三先生」(昭8)に、呉教授は「専門的訳名に対して狂の文字を常に忌まれた。そして従来「デメンシア」を痴狂と訳していたのを明治四十一年頃より改めて痴呆と訳出せんことを提唱せられたのだが……」

これらによつて見れば、デメンシアの訳語としての「痴呆」は明治三十年代の半ばには、既に出てきている。しかし一般的ではなかったらしい。だから呉教授が明治四十一年頃に「痴狂」をやめて「痴呆」にしよ、と提唱している。

しかるにこの提唱もまた医界に広く一般に受入れられたわけではなかったらしい。大正十二年の辞典で、デメンシアの訳語は麻痺症（ただしデメンシアセニレスの訳語は老人性癡呆）である。

斎藤茂吉が大正十年頃オーストリア留学中指導教授から「老耄性痴呆」の研究テーマと材料を与えられたと書いている。デメンシアの訳語は明治の三十年代から大正時代をつうじて、だんだん「痴呆」に収斂してきたものかと思われる。

アホはどこから来たかしら

お言葉ですが…



高島俊男 藤枝リュウジ
イラストレーション

痴呆ちほうというのはごく新しいことばで、むかしからある「あほう」(のち「あほうじ」)を漢語めかして、やや高級げに言ったものであろうことこれまでに申しました。

ところがこの「あほう」の素姓しらがなかなかむづかしい。そもそも和語なのか漢語系(外来語系)なのかもはっきりしない。

江戸時代には、秦始皇の阿房宮から来たという説がおこなわれ、字も「阿房」と書いた。——いや江戸時代どころか、小生らが子供のころでもまだ通用してましたね。「秦の始皇帝がアホウ宮というアホなものを作ったからアホヤ」と誰かに教えられたおぼえがあります。

これは一応外来説だが、無論マトモな語源説としてはお話になりませ

ん。

もうすこしお話になりそうな説もその後いろいろ出ているが、残念ながら万人を首肯させるに足るようなものはない。

『大言海』(大槻文彦)は、「あわてる」「あわを食う」の「あわ」に坊をつけた「あわ坊」がつづまったものだろう、と推測した。

柳田國男は、アホもバカも同じヨコから変化発展した兄弟分、という説。ヨコは古事記の歌謡に見えている古い語で、いまも「おこがましい」の形で生きている。

大槻説も柳田説も今ではほとんど支持する者はないが、しかし双方とも和語として考えていることには注意すべきだろう。

この種のごく一般的な日常語の源

を舶来の文献にもとめようというのはおかしい、と柳田は言う。この点は榎垣実つねぎも「こういう基本的な用語が外来語で間に合わされているはずがない」と同意見である。

まことにその通りと思うが、しかしまた外来語が一般大衆の日常語になった例もたしかにあるので、なかなかむづかしいところなのである。

いま辞書で「あほう」を引くと、鎌倉時代ごく初期(十三世紀初め)、鴨長明『発心集』八の、

〈臨終にきまざま罪ふかき相どもあらはれて「彼のあはうの」と云ひてぞ終りにける〉

がまず引いてある。

観山で修行した聖梵しやうぼんと永朝えいちょうという二人の学僧がいっしょに奈良へ行

き、聖梵は東大寺に、永朝は興福寺に入った。永朝は心がけがよかったので出世して僧都に至った。聖梵は性悪なので学問はできたが出世できず、晩年両眼つぶれ、臨終には罪悪の相あらわれて、「あのあはうの」と言って死んだ、——という話。

この「あはう」は隔絶して早く、以後約三百年、他に例がない。人のセリフのなかでしか出て来そうにないことばだから文献にのこらなかったのかもしれない。しかし発心集のなかでも巻八は後人の増補である可能性があらしく、してみるとこの「あはう」は鎌倉初期の語ではないかもしれない。松本修『全国アホ・バカ分布考』(太田出版)に

考察があります。

この『全国アホ・バカ分布考』
(以下分布考)という本はなかなか
異色ある本なので、ここでちょっと
ふれておこう。

これは、テレビ局の人が若い熱意
とテレビの威光をたよりにガムシャ
ラに調べて書いた本である。

なにぶん基礎がないこともあり、
率直に言つて甚だあぶなっかしい。

最もいけないのは「何事も手をつ
くして調べればわかる」と思いこんで
いることだろう。学者にも相談して
いるが、あまり筋のいい(あるいは
当該テーマに適当した)人にはめぐ
りあつていない。学者というのは、
相手がテレビの人となるとずいぶん
無責任なお上手を言うものだ(本職
は素人に甘いのもかもしれないが)。
しかしそういうものであることを
十分念頭において見るならば、資料
はよく集めてあるしおもしろい記述
もある。資料の点では小生も相当お

かげをこうむっております。

発心集のつぎはいきなり戦国時
代、十六世紀半ばである。分布考は

『時代別国語大辞典 室町時代編』に
よつて京都相国寺住持惟高妙安の
『詩学大成抄』の一句をあげる。

へ何ゴトニモナマ心エナコトヲス
ルゾ。ココラニアハウト云ツレゾ
その後『日本国語大辞典』第二版
が同じ惟高妙安の『玉塵抄』に用例
を見つけている。

へ物もしらぬ、しろい黒をもわき
まえぬたくらだ、ここらにあはう
と云やうな心ぞ。うつけ、あやか
りと云心ぞ

ともに惟高妙安の講義を弟子が筆
記したものなのだろう。玉塵抄は、
たくらだ、あはう、うつけ、あやか
り、とアホのオンパレードだ。
いづれにも「ここらにあはうと
云」とある。その「ここら」とは京

都のことか。ここら以外では言わな
いことば、の口吻である。もしそう
だとすれば、三百年ものあいだ
「あはう」が京都の外へひろがらな
かったとは考えにくい。

江戸時代になると、あはう、あほ
う、阿房はいくらでも出てくる。た
だし「阿呆」は前回申したごとく幕
末ヘボンの辞書まであらわれない。
一般にこう書かれるようになったの
は明治中期以降のことである。

なお分布考は、元明ごろの支那南
方の俗語杭州阿呆(「杭州の抜作」
の意)が室町期の日本に文字として
入り、それを日本人がよみあやまっ
てできた語、とするのだが、これは
いくつもの假定をつみかさねたもの
で、その各段階がみな、なかなか考
えにくい。それに、文字として入っ
たのなら表記「阿呆」を伴いそう
なものだが、これがあらわれるのは幕
末なのである。

金田一春彦先生が学生のころ、国
語学をやりたいと父京助に相談した
時京助は、それはよいがやってはい
けないものが三つある、とその筆頭
に語源の研究をあげた。「たいてい
コジつけど、学者仲間からは相手に
されない」と言つたそうである
(『父京助を語る』。ちなみにあとの
二つは詩の韻律と国語系統論)。

語源に関する本のなかで小生最も
敬服したのは阪倉篤義『日本語の語
源』(講談社現代新書)だが、この
なかで阪倉先生が、実証的研究が進
むにつれて語源究明の困難さがいよ
いよ明らかになる、と書いている。
研究が進むほどわからなくなるとい
うせつない分野なのである。
アホの由緒も、調べるだけ調べた
上で、「わかりません」と降参する
のが最も穏当な態度であるかもしれ
ません。